猫ひっかき病

松本治恵
大分大学医学部脳・神経機能統御講座(眼科学)

はじめに

「動物媒介感染を3つ挙げよ」と言われても,「1.トキソプラズマ症, 2.トキソカラ症, 3.……」となかなかあとが出ないことや, 視神経炎やぶどう膜炎の原因を考える際にもついつい忘れてしまう疾患があります。この章では,「3分クッキング」ならぬ「3分リーディング」で『猫ひっかき病』を整理してみましょう。歴史上の大物たちのヘルプも少しお借りしたいと思います。

織田信長からのアドバイス:直感こそすべてだ!

以下のような所見をみたら, まず「猫ひっかき病, 別名Cat-scratch disease(以下CSD)」を思い出しましょう!

<眼所見>(図)

- ●視神経網膜炎・・・乳頭の発赤腫脹, 乳頭上に白色腫瘤状の滲出性病変, 乳頭周囲から黄斑部の網膜浮腫, 黄斑部の星芒状白斑, 網膜静脈の怒張, 網膜出血
- ●網脈絡膜炎・・・白色小円形の網脈絡膜滲出斑
- ●ぶどう膜炎
- ●結膜炎・・・結膜結節を生じるParinaud's Oculoglandular Syndrome

<蛍光眼底造影>

乳頭上毛細血管から色素漏出, 網脈絡膜滲出斑に一致した過蛍光

豊臣秀吉からのアドバイス:全身をくまなくチェックせよ!

猫(猫ノミ)と接触後1〜2週で感染部皮膚に紅色丘疹が出現し, その1〜2週後に所属リンパ節の腫脹や発熱などの感冒症状が続く。さらにその1〜2週後に視力が低下する。

徳川家康からのアドバイス:何より確実なのが抗体価測定である!

*Bartonella henselae*の抗体価(IgG, IgM)を測定(民間検査機関SRLなどで可能)する。

CSDはグラム陰性桿菌の*Bartonella henselae*(Warthin-Starry染色陽性の小桿菌)が原因である!

治療:天下泰平のために・・・

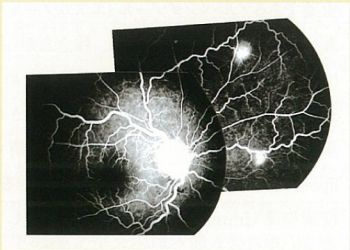
元来, 自然治癒傾向もあるが全身症状や視力障害があれば抗菌剤(ニューキノロン系, マクロライド系, ニューセフェム系)を使用する。

また, 視機能障害が強い視神経網膜炎に対しては, ステロイドの全身投与も必要である。プレドニゾロン内服(30〜40mg/日から漸減), 状況に合わせてステロイドパルス療法を考慮してもよい。

天下人からの総合アドバイス:思い込みを捨てること!

1. ペットの飼育歴がなくても, 猫との接触は否定できない(特に小児の場合)。
2. 猫と直接的接触がなくてもCSDを否定できない(猫やノミなどと間接的に接触した可能性あり)。
3. 発熱やリンパ節腫脹のないCSDもある。

みなさん, この眼所見をみたら「CSD」を疑ってかかることが大切です。



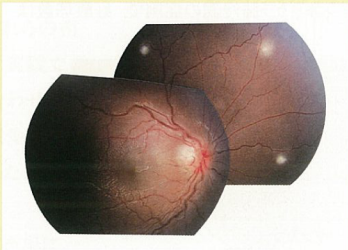


図 猫ひっかき病